

ブレイディみかこ著

『他者の靴を履く』

アナーキック・エンパシーのすすめ

文藝春秋、二〇二二年

安井 朱美



「エンパシーとは何か」と試験で問われたら、いったいどう答えるだろうか。英国に住む著者の十一歳の息子の答えは、英語の定型表現の一つである「自分で誰かの靴を履いてみる」というものだった。この息子は『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』（新潮社）という名言を以前にも残している。この本にちらっと出ていた「エンパシー」という言葉が意図せぬ形で独り歩きを始めたことを著者が危惧し生まれたものが本書である。

著者はエンパシーの日本語訳は「共感」でいいのかと疑問を投げかけ、エンパシーの種類や歴史を紹介、そして「エンパシーの達人」として、アナキストの金子文子为例に挙げる。過酷な状況に絶望して十三歳で自殺しようとした彼女が寸前で思いとどまれた理由、それは、いつもと全く変わらぬ油蟬の鳴き声を聞いたからであった。コグニティブ・エンパシーは、自分がいる狭い世界とは異なる世界の存在を想像する力であり、他者を理解するためだけではなく、自分のため、自分が生き抜くために必要な能力だと説く。

では、エンパシー能力は高いほどいいのかというと、どうもそうでもないらしい。ドナルド・トランプの熱狂的な信者は、エンパシー力が高いからこそ、強烈な対象であるトランプに感情移入し過ぎて自分を喪失した「靴を履いた対象に自己を支配されてしまっている例」であると指摘する。このようにエンパシー力がある特定の他者に吸い上げられた状態になると、自分の頭

で考えられなくなり、いいように利用され、気がつかないうちに敵であると信じ込まされた相手を攻撃することさえある。エンパシーに満ちあふれた社会は抑圧的で危険なのだ。これこそがまさにエンパシーの「影」の部分である。それゆえ、社会にはエンパシーだけでは不十分で、あらゆる支配を拒否する「アナキキ」という軸が必要だということ。

一方、エンパシーの「光」は「人間同士が助け合うことを可能にする」というものだ。コロナ禍で観光や外食産業は低迷し、医療は逼迫した。さらに、教育格差や貧困、失業、DV、自殺やSNS上での陰湿ないじめ等、数々の社会問題も改めて浮き彫りになった。私達は、そして私はこれらの問題にいったいどれほど真剣に向かい合っていたのだろうか。喫緊の課題が今、そこにあるのどこか他人事だと感じていたのではないか。自戒を込めて聞きたい。まず誰かの靴を履いてみることを、せめて片足でも突っ込んでみようとする。自分が、自分の世界の尺度（これが当然でこうあるべき、これが正しいなどの思い込み）を疑う一歩となるのかもしれない。物事を考える尺度は多様なほど、自分の判断や気持ちを客観的に見るきっかけとなりえるからだ。「何もしないことが他者を傷つけることになる」と筆者は言う。私達の抱えている課題を私達一人ひとりが自分事として捉え、解決しようと努力することが求められるのだ。もちろん一朝一夕にはいかない。だからこそ、エンパシーを身につけるためには長い時間と訓練を必要とするのだろう。

本書には「地べた」という言葉が何度も出てくる。それはあらゆることが足元で繋がっているということだ。この世の中には互いに異なる多くの個人が存在する。多様性の時代と言われて久しいが、どこまで自分の世界とは異なる「個」の多様性を認識できているのだろうか。自分とは違う他者が存在するからこそ、互いを補い合うことができる。そして多様な個人が集まり、社会や国となり、世界ができる。すべてのことが繋がっているのだ。筆者の主張通り、自分から遠いものやことを想像する力（エンパシー）と自分軸（アナキキ）、両者がセットになってはじめて「地べた」から世界が繋がりが、課題解決への一筋の光が差し込むのではないだろうか。イギリスでは幼いうちからエンパシーを教わり、家庭でも社会問題のトピックが頻繁に話題に上り、互いに意見を述べ合う文化が根づいているという。日本が学ぶべきことは多い。